

羽黒山の五重塔

羽黒山の五重塔は、931～938年に最初の塔が建てられましたが、1372年に再建され、1608年に修理が行われました。杉を使った塔の高さは29mで、国宝として登録されています。この塔は、日本で古くから保存されている11の五重塔の1つです。

最初の塔は、平将門(903～940年)の命令によって建設されたと信じられています。平将門は、天皇への反乱を率いた武士です。伝説によると、彼は、妙見菩薩を祀った寺に詣でるためにこの山によく来ていた、と伝えられています。将門が国に背いたとして討たれると、彼の怒れる霊を鎮める力を持っているのは修験道の行者だと広く信じられるようになりました。

明治時代(1868～1912年)の間に、政府は神道を国教だと宣言しました。仏教と神道について、その組織と神仏は何世紀もの間一体化していたのですが、両者を分離する法令が出されました。羽黒山の仏教施設のほとんどは破壊・撤去されましたが、この五重塔は残り、羽黒山山頂にある「三神合祭殿」の末社となりました。この塔は、羽黒山のふもとに位置しており、この塔は、修験道の信者が詣でやすい別の場所を提供していました。

塔は装飾的な機能を持つのが一般的ですが、神々を祀っているものもあります。羽黒山はこの五重塔には、国造り・農業・商業・薬の神である大国主命が祀られています。

この塔は、古いスギの森の中に建っています。五重塔のすぐ近くには、この山で一番大きなスギの木である「爺杉」が立っています。爺杉の幹周りは10mで、樹齢は1,000年を超えると推定されています。この木は特別天然記念物に指定されています。